

校長室だより

共学共高

第
44
号

令和5年5月12日発行

発行責任者

白梅学園高等学校長

武内 彰

進化する授業～グループ学習の取組

5月12日(金)第3時限目、H先生が担当する1年8組の「英語コミュニケーションI」の授業を参観した。授業開始のチャイムが鳴る前に、H先生が電子ボードにグループ分けを発表する。グループ1から9まで3名程度のグループに分かれている。例えば、グループ1は、出席番号4、13、27のメンバーで構成されている。各グループの教室内の位置も示され、チャイムが鳴ると、生徒たちは自分のグループの場所へと移動し、机を向かい合わせに配置する。ここで、あいさつである。全員が起立し、「お願いしまーす」と声をそろえる。H先生は、毎時間グループ学習を取り入れているという。校内を巡回しているとき、H先生の授業ではこうして机を合わせた小グループでの学習をしている様子が気になっていた。当日の朝にH先生にお願いして1年8組にお邪魔することになったという訳である。教室へ向かう途中で、移動中の1年生たちとすれ違ったが、元気よく挨拶してくれる生徒たちばかりであった。私も校内で生徒とすれ違う時に声をかけるが、今年の1年生は、ひととき挨拶の声がしっかりしている印象だ。1年8組の教室に入ると、複数の生徒が会釈してくれる。もちろん、「何で校長が?」と驚いたような表情の生徒もいる。時々、こうして1コマの授業全体にお邪魔することがあるので、そのときはよろしくね。



さて、授業の冒頭は、単語帳を使った語彙(ごい)の学習である。H先生が英単語を発音し、それに生徒全員が続いて発音する。単語帳の5ページ分について終了すると、グループ内での取組が始まる。グループ内でAさん、Bさん、Cさんを決め、まずはAさんが1ページ分の英単語を発音し、次にBさんとCさんが続く。2ページ目はBさんが発音し、A

さんと C さんが続く。これを繰り返していくのである。こうしているうちに、単語のスペリングや意味が定着するのであろう。個人での取組よりも効果が高いのかもしれない。ちなみに、最後に登場した「penalty」のアクセントは第 2 番目の母音 a のところではなく、最初の母音 e のところであることが意外であった。ついつい、日本語でペナルティと「ナ」にアクセントを置いて発音してしまいがちだ。同様に、award も日本語の発音に引っ張られがちな単語である。「アワード」ではなく「アウォード」であることに注意が必要だ。(カタカナで書くこと自体に無理がある気もするが、お許しを。)

続いて、「Gトレ」である。(私には Group トレーニングなのか、Grammar トレーニングなのかはわからない。)
「おじいさんの知恵」というタイトルの本文に関連した英単語がいくつか並んでいて、英語で書かれた定義(意味)と結びつける作業である。例えば、retire という単語は、定義 to stop working when a person gets old と結び付けてあげればよい、というものだ。各自で終えた後、次は英作文の空所補充に取り組む。例えば、「私の家は公園の隣にある」であれば、My house is () () the park. とあり、空所を埋めるのである。まずは個人で取り組み、その後、グループ内でどのように解答したか、話し合っていく。一定の時間が経過したところで、H 先生がグループを指名し、グループ内の A さんに解答を発表してもらう。1 周すると、次はグループ内の B さんに発表してもらう、といった具合に授業が進んでいく。

次に、内容正誤問題である。本文の下に、いくつかの英文があり、本文の内容に合っていれば○、合っていなければ×をつけるというものだ。まずは、全体で複数の問題を確認する。その後、CD でネイティブの読む本文を聴きながら内容を把握していく。各自で○×の判断をした後はグループ内でなぜ○なのか、あるいは×なのか意見交換していく。全部で 4 問あったが、全体で確認もする。H 先生が「○を選んだ人？」と聞くと、全員挙手することもあれば、○と×に分かれることもある。この辺りは、本文中で every day なのか every week なのかを正確につかみ取る必要があったようだ。本文の内容はなかなかジョークがあって面白い。子どもたちが来てにぎやかになった公園にいる老人が、子どもたちに「これから毎日来たら週当たり 5 ドルをあげる」と話し、実際にお金を与える。ところが次の週には「十分なお金がないから、25 セントしか払えない」と老人が言う。子どもたちは不満をこぼし、「それなら 25 セントのために公園に来るのは無駄だ」と言って、来なくなる。公園に静寂が戻る、というものだ。私の目の前にいる生徒たちに、「こういう内容？」と尋ねたら、うなずいていた。



続いて、Oral Reading である。H 先生が本文を読み、全員で声をそろえて繰り返す。いわゆる、コーラスリーディングと呼ばれるものだ。発音のポイントがいくつか確認される。例えば、when I や I'll give you. といったところでは音がつながるのである。前者では、「ホエンアイ」ではなく、「ウエナイ」と聴こえる。後者では、アイルギブユーではなく、アイウギヴと聴こえる。こういう音のつながりがあるって、ネイティブの発音が聴き取れないことは私も数多く体験してきたところだ。H 先生がグループ 2 を指名すると、グループのメンバー全員が起立して、先生に続いて英文を繰り返す。終わると周囲から自然に拍手が起きる。いい場面だ。白梅の生徒らしさが表れる。同様に、他のグループでも繰り返される。

続いて、誤文訂正である。本文の同じ内容の英文が並んでいるが、一文ごとに誤りがある。それを各自で 3 分間取り組んだ後、正しい英文が CD から流れる。それを聴きながら、自分の解答が合っているかどうか確認する。さらに、グループ内で共有するのである。こうすると、わからなかったところがあったとしても、正答が明確になる。

結びは、やや難度が上がる作業だ。本文に出てくる単語や語句が十数個書かれたテキストを見ながら、CD の音声の後に本文の英文を繰り返すリーディングである。それが終わるとグループ内で B さんがリーダーとなって本文を読み、A さんと C さんがヒントとなる単語・語句を見ながら、後に続くリーディングを行うのである。自然と本文そのものが頭に入ってくる取組だ。

授業終了後に、生徒に尋ねてみた。(遠足の時に私と一緒に写真をとった Y さんである)「普通の授業よりもグループ学習の方が、かなり楽しい。」「毎回グループのメンバーが変わるのは、新鮮です。」といった声が聞かれた。

H 先生が、毎回このグループ学習を取り入れているのは、なかなかのことである。私がお願いしている「生徒間の対話・表現」は当たり前になっていて、先生が teacher というよりは、facilitator (進行役) としての役割を担っている。そして、生徒たちは真剣にかつ嬉々として学んでいるのである。校長としても、白梅学園の授業が進化していくことは、大いなる楽しみの一つである。

(共学共高とは：本校のディプロマポリシー (育てたい生徒像) の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す)